



筑紫女学園大学リポジト

高麗写経—様式的特徴と思想的背景—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-11-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 権, 熹耕, KWON, Hi-Kyung メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/541

【特別研究会報告】

高麗写経－様式的特徴と思想的背景－

権 熹 耕

Illuminated Sutras in the Goryeo Period

Hi-Kyung KWON

2015年11月26日
本学総合会議室

はじめに－写経の歴史－

写経は、筆写した経典を意味している。写経の起源は、釈迦の金口から送出された仏言を、釈迦の弟子たちが記録したことにある。また、最初の写経は棕櫚の皮に書かれていた貝葉経である。中国の写経は、これらの貝葉経の翻譯からその歴史をたどるべきである。それ故に、韓国の写経の歴史と多様な様式を考察する前に中国の写経についてしばらくみてみようと思う。

『魏志』によると初期段階の中国仏教の教義は、口伝による誦に依存していた（註1）。その後の仏教経典の中国伝来については、後漢代の明帝の時期（永平10年・AD67）に中印度の僧侶である攝摩騰、竺法蘭が仏説の四十二巻を持って来たのがはじめてであると伝えられている。

中国の仏教の経典翻譯は、歴史的にみると古訳と旧訳と新訳がある。古訳の代表者としては西晋（AD265～316）の竺法護があり、旧訳の代表者は東晋（AD317～420）の鳩摩羅什である。そして新訳の代表者としては唐（AD618～907）の玄奘が挙げられる（註2）。それゆえ、古訳が始作されていた時から中国の写経はもう始まっていたといえよう。

このような観点から見る時、韓国の写経の本格的な歴史もやはり仏教が中国から伝来した時に始まったといえる。韓国の三国時代に最も早く仏教を輸入した高句麗では、小獸林王二年（AD375）に前秦の僧侶である順道によって、そして百済の場合は、枕流王元年（AD384）に東晋から来て仏教を布教した胡僧の摩羅難陀によって仏教が伝えられた。新羅は、これらより仏教を受け入れるのが遅れ、法興王十五年（AD528）にいたって仏教が公認された（註3）。新羅においては、仏教が公認される以前から仏教の流入があったと思われる。ただ、公式的に仏教を認める過程でかなり長い時間がかかった。すなわち貴族達の頑強な反対があったため仏教の公認が遅延

され、法興王十五年（AD528）になってやっと仏教が公認されるに至ったのである。仏教公認には、その一年前に殉教した異次頓の死が大きい役割を果たした。異次頓は、新羅の慶州に寺を建てようとしたが失敗し、刑場に連れて行かれる時「もし私の首が切られるならば、かならず赤い血ではなく白い血が流れるだろう」と予言し、その通り白い血が噴出した。仏教の輸入に反対していた貴族達も異次頓の白い血を見て仏教を受け入れることに同意したと伝えられている。

また、写経は仏教の輸入と共に伝えられ、仏教伝播の重要な手段になった。換言すれば、写経の目的は布教にあったことを意味する。

このように写経の第一の目的は広宣流布であったが、写経する人達の苦勞を賞讃するため、写経すること自体が功德を積む事になる点が強調された。写経の書者は勿論、写経の発願者、写経を持っている者、さらに写経を読誦、解説する人も功德を積めるとの論理が強調された。

しかし、木版印刷の発達で写経の第一次的な目的であった布教が版経によってなされるようになったため、第二次的な目的である功德の意味のみが残され強調されるようになった。功德の意味が強調されるようになって、写経は染色紙に金泥あるいは銀泥で書かれる装飾経として自然に発展した。

最も古い版経は、中国の場合は細密な巻首画が描かれていて咸通九年（AD868）という制作年代も書かれている『金剛般若波羅密経』であり、韓国の場合は1966年に仏国寺の釈迦塔から発見された景德王十年（AD770）に制作された『無垢淨光大陀羅尼経』である。この版経によって新羅でも早い時期に既に版経が制作されていたことが明らかになった

一方、韓国の写経の中で一番古い装飾経としては、三星博物館所蔵の新羅時代の写経の二巻の中の一巻である紙本墨書の『大方広華嚴経』がある（註4）。この写経は、紙本墨書であるが、表紙は厚い紫紙で、その表裏に金泥・銀泥で豁達熟練の手で絵が描かれているので、装飾経の範疇に入れて考察することができる。現在、表紙は二片の断片となっているが、この二片の表裏が写経の表紙と変相画紙にあたると思われる。一面は、草花紋と神将像が描かれているので表紙画として推定される。その裏面には仏と菩薩を中心として樓閣と獅子座が描かれていて変相画ではないかと思われる。

第1章 文献記録に見る金泥・銀泥写経と写経院

新羅の伝統を継承した高麗時代は、写経の水準が絶頂に達していた時代である。高麗時代の初期の写経、特に金泥或は銀泥の写経に関する記録は『高麗史』にかなり多く見られ、また写経院に関する記事も見いだすことができる。

『高麗史』の列伝の崔承老条によれば、成宗元年（AD982）に写経と塑像には珍宝を使用しないように勧めた記録があるので、この頃には金・銀泥写経が盛行していたと推測されるが、明宗五年（AD1175）条（註5）と文宗十二年（AD1058）条（註6）および文宗三十一年三月（AD1077）条にも金泥銀泥の写経制作を推測させるような記録が見える。

肅宗六年（AD1101）、王が金泥の『妙法蓮華經』制作を慶讃した記録があり、また同王七年（AD1102）条にも金泥の『瑜珈顯揚論』が制作されこれを慶讃したという記録が見える。さらに毅宗十年（AD1058）四月条にも金・銀泥で『華嚴經』二部を写成したという記録が見られる（註7）。このような記録から、その当時の高麗王室の写經制作の意欲を十分に読みとることができる。

明宗十一年（AD1181）には写經院の記録が『高麗史』に見られ着目される（註8）。しかしさらに古い記録が発見されている。それは松広寺の聖宝博物館所蔵の『妙法蓮華經撰述』第一巻と第二巻を合本した經典である。この經典は、朝鮮の世祖年間に刊經都監で翻刻されたものであるが、奥書によると、版下本が壽昌元年（高麗獻宗元・AD1095）に興王寺で制作されたことがわかる。また、版下本の書者である二人の人物の中の一人が写經院の書者柳俊樹と記されているので、写經院が獻宗元年に既に存在していたことが知られる（註9）。写經院の場所に関してはそれ以外にも、忠宣王四年（AD1312）の時、王が命じて金字藏經を旻天寺で写成させたという記録がある。これらの記録により写經院や金字院・銀字院が、興王寺や旻天寺などの大刹に置かれていたことが知られる。

また写經院の設立の時期は獻宗元年よりさらに遡る可能性がある（註10）。『高麗史』には、高麗の前期には写經院という名の記録が載せられているが、後期になると金字院・銀字院という記録がかなり多く現われている。

忠烈王代時代の金字院に関する記録をさがして見ると、忠烈王七年（AD1281）、当時承旨であった廉承益が自宅の一部を新築した時、其人を負役させていたのを忠烈王の王妃である蒙古女齊国大長公主が知って大怒したという。驚いた廉承益は、その家を金字写經大藏所にするよう王に請願し、王がその請願を受け入れたという記録があって、その金字写經大藏所が金字院であると考えられる（『高麗史節要』）。また同王九年（AD1283）には、王が齊国大長公主と一緒に金字大藏院で僧侶達を供養したという記録も見られ、同王十四年（AD1288）五月条には王が金經社に行幸したという記録があり、同王十五年（AD1289）には金字院に行幸して大藏經を慶讃した記録があり、初めて金字院という名称が現われる。また同王三十四年（AD1308）条には、三大藏所の五大部藏を写成させた記録もある（『朝鮮仏教通史』）。このように記録には、金字写經大藏所、金字大藏院、金經社、金字院などの呼称が登場するが、このような呼称は金字写經の制作所を指し示す名称であると考えることができる。

忠肅王元年（AD1314）には、正月に王が銀字院で僧侶萬恒を訪問した記録があり、銀字院の存在が確認できるが、現存する高麗国王発願の銀字写經によって忠肅王以前にも銀字院が存在したことを推測することができる。

このように、忠烈王以後には金泥・銀泥写經の制作所を単純に写經院と呼ぶのではなく、金字院と銀字院として区別して呼んでいる。これらの変化は、金泥・銀泥の写經の制作が王室の重要な国家的な事業になったことを意味する。

第2章 高麗写經の様式的特徴

現在足跡さえも探ることが難しい高麗の鑑賞画と異なり、高麗後期の高麗国王発願写經や個人発願の写經は、仏画と共に相当の数が残されている。これら高麗写經と仏画は、高麗人の美意識を今に伝える作品である。その意味で高麗写經は高麗仏画と共に、失われた高麗絵画の水準を定める鍵であり、韓国美術史の鼎立のため重要な分野である。

高麗絵画に関する足跡を振りかえってみると、文献の上では、李寧が「礼成江図」を画いた記録があり、高麗時代にも真景山水が描かれていたことを意味する（註11）。また、宋の徽宗が高麗画工の絵を見て感歎したという記録や、毅宗の時に李琪という高麗画工が絵の対象を本物のように描いたという記録もある。このような記録によって高麗の感賞画の水準を十分に推量することができるが、現在残っている作品は恭愍王が描いたと伝えられている「天山大獵」（註12）、李齊賢が描いたと伝えられている「騎馬渡江図」（註13）だけである。

しかし高麗仏画と共に写經は相当の数量が遺されているので、実作品にもとづく研究が可能である。このような高麗写經はなによりも高麗の独創的な様式で制作されていることがもっとも意味が大きい。

高麗写經は、その発願文から高麗国王・王室発願の写經と個人発願の写經とに分類することができる。それ故に高麗写經の研究は高麗国王・王室発願の写經と個人発願の写經と分類して考察すべきである。

1、高麗国王発願写經

高麗前期の高麗王室発願の写經には『大宝積經』第32卷（註14）がある。それ以外の高麗国王発願の写經は全て高麗が元に支配されるようになって以降すなわち忠烈王以後の作品である。忠烈王以後の高麗国王の発願の作品としては、まず忠烈王代の作品として、『不空罽索神變真言經』（註15）、『文殊師利問菩提經』（註16）、『仏説菩薩本行經』（註17）、『菩薩善戒經』（註18）、『顯識論』（註19）、『仏説雜藏經』残卷（註20）、『妙法聖念處經』（註21）等がある。また忠肅王代の作品として『阿育太子法益壞目因緣經』（註22）、『仏説大吉祥陀羅尼經・仏説普賢陀羅尼經』（註23）等がある。

このような高麗国王発願の写經の特徴は、卷子本の体裁をとること、表紙画は蓮唐草或いは宝相華唐草（花紋をジグザクに配置し花紋を唐草で連結させている）であること、変相画は独尊像が描かれることである。

特に注目すべきことは、忠烈・忠肅王代の高麗国王発願の写經は密教的な要素が強い經典を主に作成したことである。このような特徴は、高麗が本格的に元の支配下に入っていた時代的な状況を反映したためであろう。密教的なものを通じて現実的な苦痛から逃避したいという願いが込められていると思われる。

高麗王達の密教經典に対する関心を端的に読みとることができる史料は、忠肅王代に作成され

たとえられている金泥密教大藏經百三十卷に関する記録である（註24）。高麗の写經僧と元の皇室との関係についても『高麗史』の記録を注視しなければならない。これらの記録によれば高麗の写經僧は多くの場合、一年に百人ぐらいが元に徴用されたことがわかる。徴用された写經僧達は楷書を能くする者であった。当時、元は高麗から写經僧ばかりではなく仏經紙も数多く輸入したと記録されている。

このように元に徴用された高麗の写經僧がどれほど有能であったかを示す史料がある。それは北京附近の房山県の石經山華嚴堂を補修した慧月の遺品と記録である。慧月の仏經に関する該博な知識と信仰心は現在に至るまで人びとの口に膾炙されている。慧月は、自身が補修した華嚴經石板一枚に高麗僧慧月と自分の名前を刻み、自分が高麗僧侶であることを明らかにしている。

慧月の行蹟については『重修華嚴經本記』（註25）の撰文に詳細に記録されている。慧月は「石經山華嚴堂を補修するため元の資政院の院使資徳大夫高龍福と匠作院の院使申黨住を訪問して修補の布施の金銭を持った」と書いてある。高龍福と申黨住は、高麗人であるが元皇帝から寵愛を受けた宦官達である。

これらの記録から、高麗写經僧達の筆力と經典に対する該博な知識を元がどれほど選好していたかを知ることができる。

2、高麗個人発願写經

個人発願写經としては、高麗前期に制作された作品では日本福岡市の東長寺所蔵の『仏説彌勒成仏經』（註26）と三星美術館所蔵の『大般若婆羅密多經』第七十五卷（註27）があるが、この二つの作品は皆表紙が剥落し、前期の高麗個人発願写經の表紙画や変相の様式を確認するのは難しい。

高麗後期の個人発願写經には発願文があり、年代が確実な写經と年代が不確実な写經がともに数多く伝えられている。特にこれら写經の中で『妙法蓮華經』と『大方広仏華嚴經』の作例が多く残っているのはこの両經典が沢山制作されたことを意味する。

これらの個人発願写經は親元勢力の権臣達によって制作されたことが発願文から知られる。

現在国立中央博物館所蔵の忠烈王九年（AD1283）の廉丞益発願『妙法蓮華經』七卷本一部（註28）の場合、表紙画ばかりではなく独尊の神像を描く変相画が、忠烈王の当時の高麗国王発願写經スタイルにそのまま従っているので、発願者の廉丞益が権力の中心にあったことが推定される。またこの写經の発願文によると廉丞益は国家の安寧を祈願しているが、主な願いは彼と家族の現世的な副樂と自己自身の死後の極樂往生である。

廉丞益発願本以後に制作された個人発願写經に関しては、忠烈王時代の忠烈王二十年（至元三十一年 AD1294）に制作された日本宝積寺本『妙法蓮華經』七卷本一部（註29）に至る間に写經の体裁と様式が完全に変化していることが確認できる。宝積寺本では写經の体裁が卷子本から折本に変化し、また表紙画や変相画の様式も変化している。表紙には縦に四個の宝相華紋が描かれ、これら四個の宝相花紋が唐草紋様によって連結されている。宝積寺本以後のほとんどの個人発願

写経の表紙画はこのような様式に従っている。

高麗写経の表紙画の様式的変化は、この宝積寺本から見られる。宝積寺本より前の写経の表紙画は太線と細線の二本の金泥線で四周を囲んでいるが、宝積寺本以後になると四周を囲む二本の金泥線の中に省略された花紋が描かれているなど多くの変化を見せている。しかし忠肅王復位六年（AD1337）に制作された三星美術館所蔵の卷子本の『大方広仏華嚴経』第三十一巻の表紙の花紋はジクザグに配置されている。このような特徴は卷子本において継承され、表紙画の様式と写経の体裁とが関連していることが知られる。

また、高麗写経の発願文には発願者の地位や職責等が詳しく書かれているので、高麗時代の官制研究にとっても重要な資料となる（註30）。日本京都国立博物館所蔵の忠宣王三年（AD1311）に制作された『妙法蓮華経』第五巻の発願文には、発願者である崔瑞が写経僧をやって写経を写成させたことと記されている（註31）。このような記録から、崔瑞が自身の家に写経所を設けて写経を制作した可能性も排除することができない。

高麗が本格的に元の支配の下に入った後、個人発願の写経はほとんど親元系の権力者達によって作成されたことが発願文から確認できる。これら発願文はまず皇帝萬年或は皇帝萬歳を書きながら平出させているのでこれは高麗後期の国内的の政勢を知るよい資料である。

高麗個人発願の写経の最も特徴的な様式として經典の前に変相画が描かれている点をあげることができる。日本宝積寺所蔵『妙法蓮華経』七巻本一部の場合、第一巻の巻首だけに変相画があり、変相画には釈迦眷屬図が描かれている。しかし高麗後期特に忠肅王代に至ると、日本大乘寺・天倫寺所蔵の忠肅王二年（AD1315）に制作された『妙法蓮華経』七巻本一部の場合（註32）、変相画は各巻の巻首に描かれ、しかも変相画には經典の内容がかなり詳しく描かれている。すなわち画面の向って右方三分の二ぐらいに左斜め向きの釈迦說法図が描かれ、それ以外の向って左方の余白には經典の内容が詳しく描かれている。このような様式の高麗写経の変相画は『妙法蓮華経』の変相画の独特な様式として鼎立されている。

『大方広仏華嚴経』についても変相画がある場合、やはり經典の内容が描かれているが『妙法蓮華経』の変相画に必ず描かれている說法図は見られない。しかしこれら『大方広仏華嚴経』の変相画も經典の内容が繊細に描かれていて、その經典の中心的内容を知ることができる。

書体に関しては、ほとんど高麗大藏経の書体である歐陽詢書体に従っているが後代になると松雪体などの多様な書体が混っているのが見られる（註33）。

第3章 高麗後期写経の思想的な背景

高麗写経の独特な様式と高麗後期の思想的背景とはどのような関係があるのだろうか。

高麗が元との屬国関係が完全に定着した時期に、江華島へ避難した崔氏家門の崔瑀によって元を願力で撃退させることを祈願して木版の八萬大藏経が完成された。結局高麗は元の支配下に入ったが、それにもかかわらず、高麗の王達は相変わらず願力を通じて国を守る夢をもっていた。

それで、木版の八萬大藏経で果たせなかった願いを金泥・銀泥の写経の制作を通じて実現するよう、数多くの金泥・銀泥経典を写経したと考えられる。

ここで高麗の金泥・銀泥写経の流行の背景となった高麗後期の時代精神について考えてみよう。高麗後期の時代精神を、当代最高の僧侶であった一然の『三国遺事』（註34）から考察してみよう。

『三国遺事』を通じて見た時代精神の特徴は神異的であり、呪術的である。神異的・呪術的思想は高麗後期の暗鬱な時代状況と無関係ではなかったと思う。このような社会的与件は観音信仰、龍信仰、地藏信仰、彌勒信仰等を盛行させた。特に、地藏信仰と彌勒信仰は統一新羅末から高麗初まで盛行したが、高麗中期に至って大覺国師が天台宗を鼎立したため、高麗の仏教から神異的であった要素が除去されて教宗的な性格が強く現われた。しかし高麗の末になると再び神異的・呪術的な雰囲気再興し、それと共に地藏信仰と彌勒信仰が復活した。

教宗と禪宗が無秩序に混じりあった高麗仏教界の状況に加え、喇麻仏教との接触もあったため、密教的な現世利益を追求する思想が高麗社会の全体を支配するようになったと考えられる。

このような観点で見ると、高麗人が「観世音菩薩普門品」に七難救済思想の説かれる『妙法蓮華経』を選好し、高麗後期の個人発願の写経の中に『妙法蓮華経』が最も多く遺存している理由も、当時の密教的信仰の広がりとは無関係ではないと思われる。

一方で『大方広華嚴経』も数多く遺存しているが、『妙法蓮華経』と異なり一部が六十或いは八十巻にのぼるため完全に揃って残されたものはない。しかし現在に伝わる高麗写経の中に『妙法蓮華経』と共に『大方広華嚴経』が数多く残されているのはそれほど多く写経されたことを意味する。これらの経典は代表的な大乘経典として、特に高麗後期の暗澹とした時代状況と時代精神と深く関係して書写の対象とされていたのである。

注

(註1) 塚本善隆『中国仏教通史』第一巻、春秋社、1979年、46-47頁

横超慧日『中国仏教の研究』第一章「道安以前の戒律」、法蔵社、昭和33年、27頁。

田中塊堂『日本写経綜監』「仏教伝来上代写経」、思文閣、昭和49年、1-2頁。

(註2) 前掲書『日本写経綜監』、1-2、309頁。

(註3) 『三国史記』および『高僧伝』

(註4) 三星博物館所蔵、統一新羅（天宝十三～十四載・AD754-755）、表紙・変相紫紙銀泥、経文紙本墨書。2巻のうち1巻は開くことができない状態である。

(註5) 王が、当時の人々が貴賤を問わず奢侈と飲酒が過ぎる点を指弾し、仏像と法宝（写経）以外は金銀での制作を禁じた記録がある。

(註6) 靖宗魂堂にあった金・銀泥器と北朝（遼）から祭祀の甲冑品として送られた絵彩で蔵経を写経して靖宗を追福したという記録もある。

- (註7) 毅宗は後嗣がなかったため王妃の金氏と共に、若し子が生まれたら金泥と銀泥の『華嚴經』四部を写成し、元子（王太子）が生まれたら『華嚴經』二部を写成すると誓った記録がある。
- (註8) 明宗十一年の写経院の火災は、銀泥写経を写成すると王命を受け公私が競って金銭と財物を献納し、それを無頼の輩が盗もうと写経院に火をつけたためと記録されている。この記録が写経院という機関の記録上の初見である。
- (註9) この版経の奥書は壽昌元年（高麗献宗元年・AD1095）の制作当初のものである。それには「乙亥年高麗国大興王寺奉宣彫造写経院書者臣柳俊樹書」という記録があって写経院が大刹の附屬建物にあった可能性を指摘することができる。
- (註10) 松光寺聖宝博物館の『妙法蓮華經撰述』第一巻と二巻が合本されているこの經典は、奥書に「壽昌元年乙亥年高麗国大興王寺奉宣彫造秘書省楷書同正臣南宮禮書」と共に「壽昌元年乙亥年高麗国大興王寺奉宣彫造写経院書者 柳俊樹書」と書かれている。この奥書を見ると、版下本（木版本の下書き）を書いた二人の中に南宮禮、秘書省の楷書同正（同正という意味は実際の職責ではなく虚職である）がおり、また柳俊樹という人は楷書に能通する写経院の書者であったことをわかる。柳俊樹の記事に現われている献宗元年（AD1095）の写経院の記録は、『高麗史』に載せられている明宗十一年（AD1181）の写経院の記録より八十六年も以前のものである。正史に見える初出より前の記録が伝わることから、高麗の写経院の出發については、献宗元年より早い時期まで遡る可能性も推定できる。
- (註11) 吳世昌『槿域書畫徵』第2卷「麗代編」李寧条。
- (註12) 国立中央博物館所蔵は、絹本着色で天山の狩獵場面を描写した作品である。本来は横長い巻本であったが、分れていたと思う。現在、国立中央博物館に三片が伝えられている。ソウル大学の奎章閣にも「狩獵図」の小幅の残片が一点ある。これは、恭愍王の作品と伝称されているが、国立中央博物館所蔵品のものとは画風が異なり同じ人のものとは見られない。
- (註13) 国立中央博物館所蔵、絹本水墨淡彩、縦73.6cm、横109.4cm。右上段には「益齋」という款署があり、「李齊賢」という白文方印があって李齊賢の絵であると推定されている。
- (註14) 日本京都博物館所蔵、穆宗九年（AD1006）、卷子本、表紙・変相紺紙銀泥、書体金泥、29.2cm×84.1cm。
- (註15) 三星美術館所蔵、忠烈王元年（AD1275）、卷子本、紺紙銀泥、30.4cm×905.1cm。
- (註16) 日本京都国立博物館所蔵、現在折本（原状卷子本）、紺紙銀泥、25.8cm×14.4cm。
- (註17) 三星美術館所蔵、忠烈王四年（AD1278）、卷子本、紺紙銀泥、19.1cm×716.5cm。
- (註18) 東国大学校博物館所蔵、忠烈王六年（AD1280）、卷子本、紺紙銀泥、33.1cm×129.8cm。
- (註19) 延世大学校図書館所蔵、現在折本（原状卷子本）、紺紙銀泥、27.5cm×23.5cm。
- (註20) 日本大和文華館所蔵、写経断簡、紺紙金泥。
- (註21) 日本九州大学文学部菊竹淳一教授（当時）が中国天津博物館に展示されていた写経を見て発願文だけ急いで記録して来たものを伝えて下さった。その後、何度か天津博物館に写経の行方を尋ねたが、所蔵与否の応答も拒否された。結局、調査の希望はかなわなかったが、この発願文を通して、

至元二十二年に制作された作品として高麗忠烈王十一年に国王宮主によって発願制作された高麗国王発願或は王室発願の作品であることが明らかとなった。この写経の発見が高麗写経研究に力になったことをここに記したい。

(註22) 日本京都国立博物館所蔵、忠肅王十二年（AD1325）、卷子本、紺紙銀泥、29.7cm×209.1cm。

(註23) 日本太山寺所蔵・神戸市立博物館寄託、忠肅王十一年（AD1324）、紺紙金泥、30.9cm×241.4cm。

(註24) 益壽・李齊賢『益壽亂稿』巻第五「金書密教大藏經序」

(註25) 北京図書館金石組及び中国仏教図書館石経組編『房山石経題記匯編』（1987年、33頁）「重修華嚴堂経本記」。

(註26) 日本福岡東長寺所蔵、顕宗六年（AD1015）、卷子本、紺紙金泥、高25.8cm。当東長寺本の発願文に見える「聖壽天長」は平出されていない。これは高麗後期すなわち恭愍王の時に制作された写経の奥書とは形式が異なる。むしろ日本の壹岐安国寺所蔵の高麗初彫大藏経の奥書と似ているので、奥書から見られる乙卯は高麗の顕宗の六年と認められる。

(註27) 三星美術館所蔵、清寧年（文宗九年・AD1055）、卷子本、紺紙金泥、28.7cm×510.1cm。発願文の清寧年は文宗九年である。

(註28) 国立中央博物館所蔵、忠烈王七-九年（AD1281-1283）、卷子本、紺紙銀泥、31.1cm×841.1cm。

(註29) 日本宝積寺所蔵、忠烈王二十年（AD1294）、折本、紺紙銀泥、30.4cm×11.1cm。

(註30) 『高麗史』は、朝鮮初に書かれた書物である。それ故に、高麗の忠宣王代に大規模な官制改編があったが、朝鮮時代になって整理する過程で朝鮮なりの判断で整理したので、特に官制改編の内容はかなり失われ、これは『高麗史』の史料としての弱点となっている。その意味で写経の奥書に著されている写経の発願者の官職は高麗時代の官制研究にとって重要な資料となると思う。

(註31) 日本京都国立博物館所蔵、辛亥年（忠宣王三年・AD1311）、卷子本、紺紙金泥、30.1cm×380.1cm。発願文に「特債書手」とある。

(註32) 日本金沢大乘寺・松江天倫寺所蔵、延祐二年（忠肅王二年・AD1315）、折本、紺紙金泥、30.1cm×10.5cm。

(註33) 松雪体とは趙孟頫（1254～1322、号は松雪）の書体である。高麗写経には趙孟頫の書体や顔真卿の書体などが混在している。

(註34) 『三国遺事』著者である一然（1206-1289）は、忠烈王より国尊の称号を賜り圓経冲照と号した。没後には普覚の諡号を賜った。

【附記】

本稿は、2015年11月26日（木）午後、本学総合会議室にて開催された人間文化研究所特別研究会「高麗写経－様式的特徴と思想的背景－」の発表原稿で、当日会場にて配布された。原稿作成は研究会の事前作業として行い、権先生が日本語で執筆したものに、小林が日本語チェックを加えた。

権先生は1986年に「高麗写経の研究」で九州大学の博士号を取得され、2006年に『高麗の写経』

(글고운) を刊行された著名な高麗写経研究者である。研究会では言語の壁に阻まれて先生の著書を読むことができない日本人研究者に対し、長年の調査研究の成果を120枚ものスライドを使って熱く語っていただいた。本稿が、日本での今後の韓国美術史理解に寄与することを期したい。

なお、特別研究会の詳細については本紙iv頁を参照されたい。

(こばやし ともみ：アジア文化学科 准教授)

高麗写経－様式的特徴と思想的背景－

権 熹 耕

Illuminated Sutras in the Goryeo Period

Hi-Kyung KWON

筑紫女学園大学
人間文化研究所年報
第27号
2016年

ANNUAL REPORT
of
THE HUMANITIES RESEARCH INSTITUTE
Chikushi Jogakuen University
No. 27
2016